昭和61年(1986年)1月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
1　JANUARY, 1986　毎月10日発行　第69号

教皇様の声

信仰の日

人となられたみことばを見るよろこび

〈お告げの祈り〉のとき、「みことばは人となり給い、われらのうちに住み給えり」とくり返しますが、この祈りを通して私たちは、クリスマスの秘義の中心となることがらを言い表わしています。ご託身の秘義を実現なさった処女にして母なるマリアと心をひとつにして、私たちはヨハネによる聖福音のことばを繰り返します。マリアにおいて、マリアを通して、「みことばは人となり給い」と。

同時に、私たちはこの秘義を東方の三賢人の目を通しても見つめています。ご公現を通してご託身の秘義を見つめるのです。

三人の賢人はベトレヘムに到着しました。星の導きに従って歩むうち、「子どもが母のマリアと一緒にいるのを見た。彼らはひれ伏して礼拝し、宝箱を開いて、黄金と乳香と没薬の贈り物を献上した。」(マテオ2・11)信仰の目を通したおかげで彼らは、人となり給うたみことばを見ることができました。聖ヨハネの言葉によると、神と共にあったみことば、神であるみことば、そのみことばが人となり給うた姿を見ることができたのです。

本日教会は、人間自身の深みにまで立ち入って考えています。教会は奥の奥にあるものを見つめています。信仰の目で見ると、ご公現という人間的神的なドラマが演じられているのを見ることができるのです。

そこで教会はイザヤ預言者のことばを繰り返します。

「見よ、闇は地を覆い、濃い霧が異国をつつむ。だが、おまえの上に主は輝き、その栄光が現われる。」(60・2)

教会はさらに一人ひとりのために祈ります。内なる目が暗闇を貫いて輝き、ご公現のよろこびを感じることができるように。東方の三賢人が味わった神についての知識、信仰のよろこびを、味わうことのできるようにと。

本日の祝日にあたり、私たちは人間一人ひとりのことを考えています。しかしとくに、宣教者の方々のことを。また同時に、どこでどのような方法でかを問わず、およそ宣教にたずさわる全ての人々、よき知らせ(福音)を伝える人々のために祈っています。教会は全体として福音宣教を旨としていますが、福音を伝えるという仕事、つまり信仰に仕えるという仕事は、一人ひとりの義務であります。このようなことを考えながら全ての人々のためにご一緒にお祈りしましょう。

(一・六)

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1986
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

神の家族

親の召しだしをみなおそう

「主のみ使いの告げありければ、マリアは聖霊によりて懐胎したまえり。」

聖霊の御力によるこの懐胎こそ、永遠のみことばがお送りになる人間としての生活の始まりです。御子として御父より永遠に生まれ、御父と同質(同じ本性を有する)の御方は、処女マリアの胎内に宿られたのです。〈神の誕生〉のためには聖霊の御力によるほかはありませんでした。定められたときが訪れると、神の御子は処女の胎内で懐胎され、ベトレヘムでのあの夜、この世にお入りになり、ご自分の人間性をお示しになりました。

ナザレトのイエズス誕生と共に、聖家族が全てをとのえたことになります。

マリアは、聖霊の御力によって懐胎する前からヨセフの妻でありました。同じく聖霊の御力により御子が誕生したあと、処女の夫ヨセフは、人々にとってはイエズスの養父となりました。ヨセフは、あの夜ベトレヘムでお生まれになった神の御子に対する神なる御父の心づかいに、与ることになったのです。

本日は、教会がナザレトの聖家族に特別の敬いと愛とをあらわす日です。と同時に、人類の歴史上ユニークなこの聖家族を通して、全世界の家族に心を向け、そして祈っています。

教会は使徒の言葉を借りて世界中の全ての家族に語りかけます。

「心をキリストの平和につかさどらせなさい。」(コロサイ3・15)

「キリストのおことばをあなたたちのなかに豊かに住まわせなさい。」(コロサイ3・16)

家族はまず男女の結婚の縁組に始まり、ついで神の創造の御力に協力して親となります。

神のご降誕の秘義によって、親はみずからの召しだし、つまり人間として、キリスト者としての召しだしを信仰の目で見直すよう招かれています。

世の救いは、聖家族を通じて一度そして永遠に人間の歴史のなかに根をおろしました。

世界中のあらゆる家族のために祈りましょう。すべての家族が、ナザレトの聖家族のように、みずからの召しだしに応えることのできますように。

とくに苦しんでいる家族のために祈りましょう。愛と生命に仕えるという重大な使命と結婚の不解消性を危険にさらす数々の困難におそわれている家族、神に選ばれた家族のためによく祈りましょう。

(十二・三十)

ご聖体が生む愛の義務

隣人に役立つために自分自身をささげ尽くす

今日、新たに聖別されたこの祭壇上で、秘跡として神にささげられるイエズス・キリストの犠牲、すなわちご聖体は、初代からずっとキリスト教共同体の中心であり、信者の霊的生活の深い源でありました。使徒行録によると、初代の信者は、心を一つにして、毎日神殿に参り、よろこびと素朴な心をもって食事を共にしていました。(2・46参照)また、「使徒たちの教えること、兄弟的な一致、パンを裂くこと、祈りをすることに専念した。」(使徒行録2・42)教会は、誕生以来このようにして来ました。ご聖体はキリスト教共同体の中心であります。ご聖体においてキリストは、御みずから十字架上の贖いのいけにえによって得た宝物を教会に与え、ご自身の御体と御血をもって、日々キリストに従って生きるべく信者を養ってくださるのです。

信者とキリストのこのような内的一致はまた、キリスト教共同体の中での一致および兄弟的なつながりの源でもあります。キリストのいけにえに与ることによって私たちは神と完全に結ばれるわけですが、このユニークな結びつきは、人間同士の一致と兄弟愛の心をも生み出すからです。キリスト者の使命の垂直関係と水平関係は、十字架のしるしのうちで一つに結ばれています。使徒行録によると、初代の信者たちはご聖体を祝うためばかりでなく、「資産と持ち物を売り、おのおの必要に応じてそれを分かち」(使徒行録2・45)合うためにも、共同体をなしていました。

ご聖体の秘密は愛であり、愛は私たちに愛の義務を負わせます。心を一つにしてご聖体のパンを裂く私たちは、人々の飢えや苦しみ、不幸に対して敏感になる。キリストがお与えになる神的生命をいただくとき、私たちはすすんで隣人と生活を共にする決意ができていなければなりません。愛の源であるご聖体を日々の糧とするなら、人々に何かを与えるだけにとどまらず、隣人に役立つために自分自身をささげ尽くすことができるでしょう。これについては、初代教会の信者の生活が良い模範を示してくれます。異教徒たちは、「ごらん、何と彼らは互いに愛し合っていることか!」と感嘆の声をあげたのでした。(テルトゥリアヌス・ミーニネの『ラテン教父I,471)

聖変化の間、祭壇上にともる荘厳なろうそくの光を見ていると、「異邦人を照らす光」(ルカ2・32)であるキリストを思い起こします。互いに愛し合う人々の中にいますキリストは、全教会を照らす光なのです。キリストは宣教の力のもととなる光であります。最初の信者について言われているとおり、「主は、日ごとに救いの道に入る人々の数を増してくださ」(使徒行録2・47)いました。愛する皆さん、ご聖体を祝うとき、ご聖体から輝き出るキリストの光が世界を、そして皆さんの日々の暮らしを照らすように祝いたいものです。

「ミサ」が「ミッション」(宣教。ミサとミッションとは関連している)、つまり、人々の間においてキリストを宣べ伝えることにつながりますように。

聖母マリアと共に

キリストご自身が、十字架上から、御母を私たちに示してくださいました。「これがあなたの母です」と。聖母マリアは神の恩寵の御母です。マリアこそは、誰よりもキリストによる神の贖いの力に深くかかわった御方です。救い主の御母として、聖母はご聖体にすこぶる近い御方です。聖母は、ご聖体においてキリストに出会う私たちがどうすればそこから内的生活のための力と方向づけを引き出せるかを、教えてくださいます。

「何でもあの人の言うとおりにしなさい。」(ヨハネ2・5)　聖母はみずからの生涯を模範にして教えてくださいます。ナザレトのうら若い乙女として、十字架につけられたのち復活された主の母として、聖霊降臨のとき使徒たちと共に祈る母として、聖母は神の王国の到来を切に望む心を示してくださいます。聖母はみなさんの模範であり先生です。神の神秘を「心にとどめて考え続けた」(ルカ2・19、51)「主のいやしいはしためである聖母は、神のご計画と救いのみわざに、あますところなくご自身をささげられました。「なれかし」すなわち無条件の「はい」という返事をさし上げたのです。

皆さん、いま聖別されたばかりのこの祭壇のもとで、御子の十字架の下に聖母と共にたたずみつつご聖体の秘跡にあずかり、聖母と共に主のすばらしいみ業をたたえましょう。聖母は私たちを助け、たぐいない神の至高性に目をひらかせてくださいます。キリストにおいて神との和解を果たすことができるよう助けてくださるのです。聖母は私たちに、相互の兄弟的な一致と福音を告げ知らせる責任をになっていることを教えてくださいます。聖母は、信じ、希望し、愛することを教え、私たちがキリストの教えに従って自らの生活を営むよう教えてくださいます。ご一緒に、尊いご聖体を祝うにあたり、私たちの心の中にも、マリアがお告げの時に答えたあの言葉、あの真理が響きわたりますように。「私は主のはしためです。おことばのとおりになりますように」と。(ルカ1・38)

(スイスのアインジーデルン、六・十五)

救いのあけぼの

"なれかし"の力

マリアは実に、キリストという日の出が真近に迫っていることを告げる光です。マリアのいるところに、間もなくキリストはおいでになる。目映ゆく輝く処女マリアのいるところ、信仰を呼びさまし、希望にそなえ、愛をかきたてる光が明るくともります。マリア自身は、「昇りくる太陽、永遠の光と正義の太陽」であられるキリストの投影にすぎません。言わば、太陽なしにはあり得ないあけぼのようなものです。

教皇パウロ六世は、親愛なるみなさんに、次のように言われました。

「処女マリアにおいて全てはキリストに関わり、キリストに頼っている」と。マリアは信仰の光を受けた最初の人間です。それも、太陽が現われる前からその光を受けていました。というのも、マリアは聖性という太陽から生まれ出たから。「月のように美しく、太陽のように輝き、軍勢のように恐るべきもの、それはだれか。」(雅歌6・10)　空には外ならぬ大いなる兆しが現われます。「太陽に包まれた婦人があり、その足の下に月があり、その頭に十二の星の冠をいただいていた。」(黙示録12・1)

私たちの希望の始まりから、すでに聖母マリアの姿はおぼろげながら現われていました。「私は、おまえと女との間に、おまえのすえと女の

説教・講話・書簡等の抄訳

すえとの間に、敵意を置く。女のすえはおまえの頭を踏みくだくであろう」(創世3・15)　これらの言葉には、罪とその結果に対する戦いにおいて味方として女をお選びになった神のご意志が表われています。実際この預言によれば、指名された女は悪魔との戦いの中で神の最も優れた助け手となるべく運命づけられていました。彼女は敵の頭を踏みくだく者の母となるだろう。ところで、この預言を実現することになる女のすえとはただの人間ではありません。彼はその母のおかげで確かに完全な人間ではありますが、同時にまた、真の神でもあるからです。「男を知らず、聖霊のかげにおおわれた」マリアは、天の御父の永遠の息子に人間としての本性を与えたので、彼は私たちの兄弟となられました。

旧約の全歴史はマリアに向かっています。マリアは「イスラエルの聖なる生き残り」の完全な成就、すなわち、救い主が来られるという約束を受け継ぎ、神の民になるという望みを抱く「ヤーウェの貧しい人々」の実現なのです。この「ヤーウェの貧しい人々」とは、神に全幅の信頼をもってよりすがり、神の掟に従う人びとを指しています。「主において謙虚な貧しい人々の中で、この婦人は特にひいでている。この婦人、すなわち、卓越したシオンの娘とともに、約束に対する長い待望の時期が終わり、時が満ちた」(『教会憲章』55)　マリアにおいて、旧約時代の正しい人々の生命は昇華されました。

兄弟である司教方ならびに信者の皆さん、マリアは独特な方法で贖いの光を受ける人間です。事実、マリアが生まれた最初の瞬間から原罪を免れたということは、キリストの贖いのみ業の第一にして最も根本的な効力を表わしています。それゆえマリアは神の御子のご託身に、堅い解きえぬ絆で結びつけられました。こうして御子は、マリアから生まれる以前に、この上なく崇高なやり方で彼女を贖ったのです。

無原罪の御宿りによって、マリアは、人類がキリストに贖われるべきことを知らせる前ぶれとなりました。全て人間は生まれた最初の瞬間から原罪の影響を受け、神に背く傾向をもっています。それゆえ、マリアの無原罪の御宿りは、彼女が最初に贖われた人間であること、贖いの始まりであること、残りの人間にとって贖いとは罪からの解放であること、を意味するのです。

神のみ旨に従う

けれども、愛する兄弟姉妹の皆さん、マリアは、自力では動けない受け身的な道具として私たちの贖いの始まりであるというのではありません。私たちの救いのあけぼのには、マリアの自由な意志による返答がこだましていました。彼女の「はい」、つまり、神が私たちにお望みになるようにマリアにも期待されている協力要請に無条件で応える「フィアト」の声が。

救いの第一歩を踏み出されたのは疑いなく聖三位一体の神です。純潔な配偶者である聖ヨセフが忠実に受け入れた聖母マリアの永遠の処女性こそ、神が第一歩を踏みだされたことの証拠です。キリストは、人間として、男性の介入なしに懐胎されたのです。マリアの処女性は懐妊中も出産後も保たれましたが、それはまた、マリアが神のご計画に全く従順であったことをも示しています。

マリアの答えは人類史に決定的瞬間をしるしました。それでキリスト信者は毎日「お告げの祈り」のときにすすんでそれを繰り返します。次の言葉を口にできるような人になりたいとの思いをこめて。「私は主のはしためです。あなたのおことばのとおりになりますように」(ルカ1・38)と。

マリアの喜びに満ちた「なれかし」は、彼女の自由なこころ、信頼と落ち着きを示すものです。マリアは神のご計画が具体的にどのようにして実現されるのか知りませんでした。しかし、恐れたり悩んだりするどころか、かえって自由で希望にあふれているように思われます。受胎告知の際の「はい」は、母となる申し出を単に受け入れたことを意味するのではなく、贖いの秘義に協力する覚悟を示しているのです。贖いは息子であるキリストのみわざでしたが、マリアもまた現実的で効果的な役割を果たしました。天使のお告げを受け入れたとき、マリアは、人類と神との和解という仕事に全面協力する旨同意したわけです。彼女は、理解した上、条件なしに行動しました。マリアは神がお求めになる役目を引き受ける用意ができていたのです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、マリアは道行く私たちの模範であり道標です。ここにはキリスト信者として高潔な人生を送りたいと願っている若者が大勢いらっしゃいます。(…)みなさん、マリアのように、神に対して完全に開いた心を保ち続けてください。マリアにならい、絶えずみなさんのそばに神秘的に現存なさる神に目を注いでください。みなさんの近くにおいでになる神、何度も皆さんの傍をお通りになるキリストに、思いを馳せてください。「おことばのとおりこの身になりますように」。こう言えるようになって欲しいのです。しかもマリアのように完全に、つまり条件をつけず、決定的に、おそれることなく。たとえ辛くとも、キリスト信者の従順の心をこめてこう言ってください。

(一九八五・一・三十一)

一人ひとりの応え

召しだしとは、みなさん一人ひとりが応える個人的な呼びかけである、と説明されました。応えるべきというのは、決定的な選択をしないわけにはいかないという意味です。市民が社会のなかでみずからの役目をもつように、キリスト者も、キリストの神秘体である教会のなかでみずからの召しだしをもっています。私は召しだしと申しましたが、この言葉で言いたいのは、一般的な信者としての召しだしのみならず、司祭や修道者になる特別な召しだしをも含めての話です。いずれの召しだしに対しても応えなければなりません。

若いみなさんはよくおわかりでしょう。召しだしに応えるには、識別するため(召しだしの有無を知るため)に注意深く考える努力を続けなければなりません。家族から学校へ、小教区から司教区へ、あるいは、より大きな範囲での使徒職へと、みなさんの生活計画が具体化され、現実化されていかなければならないのです。ところで、そのようなことができるのでしょうか。みなさんの生活内で、そういう風になってきているでしょうか。これが実現するためにはどうしても上からの光が必要です。すなわち、キリストの光をみずから見つけなければならないのです。呼ぶ方がキリストであれば、キリストに応えなければなりません。

国際青年年にあたり若人へあてた書簡中、私はキリストが若者にそそがれる眼差しについて詳しく述べました。「イエズスは青年をじっと見つめ、慈しまれた」(マテオ10・21)不思議な眼差し、慈しみ深い眼差しです。一対一の出会いのしるしなのです。みなさん一人ひとりがこの慈しみ深くも鋭いイエズスのまなざしを見つけ、自分で体験してくだされば、と思っています。生き方の指針はイエズス・キリストから来ます。また、生命の糧もイエズスから来るのです。まことにイエズス・キリストは、道であり真理、生命であります。(ヨハネ14・6参照)(十・二十)

不変の教え

信仰と道徳シリーズ VII

聖書解釈の基本

本日はもう一度、『神の啓示に関する教義憲章』の美しい言葉を読んでみましょう。「かつて幾度か語った神は、不断に愛する御子の花嫁と語らい、福音の生きた声は聖霊によって教会に、また教会によって世界に響き渡り、そして聖霊は、信ずる者をすべての真理に導き、かれらのうちにキリストのことばを豊かに宿らせるのである（コロサイ3・16参照）。」（『神の啓示に関する教義憲章』8　以下番号のみ記す）

ここで再び「信じる」とはどういうことかを取り上げてみましょう。

キリスト教的に信ずるとは、聖霊の導きをうけて神の啓示された真理すべてに向かうことです。それはまた、キリストの福音のことばに心を開いている信ずる者の共同体となることであると言えます。以上の二つはどの世代にあっても可能な事柄です。それというのも、聖伝と聖書に含まれている神の啓示すべてを生き生きと伝達することが教会の中でちゃんと続けられているからです。またこのような伝達が可能であるのは、神の民の信仰感覚との調和を見つめつつ続ける、教導職の働きのおかげです。

正しい解釈

このカトリックの『クレド』（信仰宣言）とその源泉との関係をはっきりさせるためにもう一つ大切なことがあります。それは、聖書の神感についての教えと聖書の正しい解釈のことです。この点を説明するにあたり、前回同様、『神の啓示に関する教義憲章』を参照することにします。

同憲章の11番を読んでみましょう。「とうとき母なる教会は、旧約の全部の書とそのすべての部分をまとめて使徒的信仰に基づき、聖なるもの、正典であるとしている。なぜならばそれらの書は、聖霊の「神感」（霊感）によって書かれ（ヨハネ20・3、ティモテオ②3・16、ペトロ②1・19～20と3・15～16参照）神を作者とし、またそのようなものとして教会に伝えられているからである。」　目に見えず超越的存在である神は「聖書の作成にあたって、固有の能力と責任をもった人間を選んで、これを使用した。それはかれらが、神が望むことをすべて、またそれだけを、真の著者として書くためであった。」（11）このために聖霊が彼らのうちで、彼らを通じて働かれたのである。（11参照）

このような起源を認めた上は、「聖書は、神がわれわれの救いのために聖なる書に記録されることを望んだ真理を、固く、忠実に、誤りなく教えるものと言わなければならない。」（11）　聖パウロのティモテオへの書簡もこの点を保証しています。「聖書はすべて、神の霊感によるもので、人を教え、説得し、矯正し、義に導くために有益なものである。それは神の人が完全となり、すべてのよきわざのために準備されたものとなるためである。」（3・16～17）

『神の啓示に関する教義憲章』は、聖ヨハネ・クリゾストムスの言葉を引用しつつ、神のへりくだりについて語っています。「人間に対する永遠の知恵が、くすしくも己を低くして人間に近づかれた。それは『われわれが、神の言いようのないやさしさを知り、神がわれわれのことを考えて自分の話を加減したということを学ぶためであった。』　実際、かつて永遠の父のみことばが人間の弱い肉をつけて人々に似たものとなったように、人間の用語で表わされた神のことばは人間の話に似たものとなった。」（13）

解釈のための規則

聖書の「神感」（霊感）についての真理から当然のこととして、聖書解釈の規則が導き出されます。『神の啓示に関する教義憲章』はこの点についてごく簡略に説明しています。

まず第一に次の点をあげるべきでしょう。「神は、聖書においては、人間を使って人間の様式に従って語ったのであるから、聖書解釈者は、神が何をわれわれに知らせようと望んだかをよく知るために、聖書作者が実際に何を意味しようとしたか、またかれらのことばを通して何を示すのが神意であったかを入念に研究する必要がある。」（12）

この目的を達するため第二として、「文学類型」を考察しなければなりません。「実際、種々の方式での歴史的な、あるいは預言的な、あるいは詩的な書において、またその他の表現形式において、真理は違った方法で語られ、かつ表現されている。」（12）　作者が実際に何を言おうとしたかは、文学類型によって変わるものですから、特定の時代の特定の文化の背景をよく知らせなければならないのです。

ここで、正しい聖書解釈の第三番目のポイントがあらわれます。「聖書作者がその著書において言おうとしたことを正しく理解するには、聖書作者の時代に一般に行なわれていたその土地の通常のものの考え方、言い方、話し方、ならびに当時の社会関係によく用いられていたそのような様式に留意しなければならない。」（12）

聖書全体の内容と一体性

歴史文学的なものを正しく解釈するために以上のような詳しい指示があるわけですから、聖書の神感（霊感）についての教えという前提との関係をしっかり把握していなければなりません。「聖書は、それが書かれたのと同じ霊の光のもとに読まれ、解釈されねばならない。」（12）　「教会全体の生きた聖伝と信仰の類比（信仰の諸要素の間に見られる調和）とは、個々の信仰の要素が相互に一体性を保ち、かつ啓示全体および、啓示にふくまれている救いの実現との関係に調和がとれているということです。

聖書解釈学者の仕事とは、適切な方法を保ち、右に述べた諸原則を守りつつ、「聖書の意味を深く理解し、説明するために努力し、いわば、準備的な研究によって、教会の判断が熟するようにすること」（12）です。教会は神のことばを守りかつ解釈する命令と使命を受けているのであるから、「聖書解釈に関するすべての事は、最終的に、教会の判断のもとにおかれている。」（12）

この最後に述べた点は、聖書解釈（と神学）および教会の教導職との間の相互関係をはっきりさせるために決定的に重要です。この原則は、先に述べた啓示の伝達にも関わるすこぶる大切なものです。従って、この点を確認しておく必要があるでしょう。すなわち、教導職は神学者と聖書学者の仕事を活用するが、同時にかれらの研究成果を監視する役目をもっていると。実に教導職は神の啓示に含まれている全ての真理を守るべく召されています。

神の摂理

キリスト教的に信じるとは、キリストご自身の制定になる制度を通して教会に与えられる真理の保証を利用してこの真理を受け入れることです。これはすべての信者について言えることですが、神学者や聖書学者についても大差なくあてはまる点であります。神はご自分を啓示してくださっただけでなく、その啓示を教会に手渡して、啓示が忠実に保護され、解釈され、説明されるようにしてくださったのです。

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393